

# 海 (かいし) 市 No. 11

## ● 詩

02 前田 勉 いちにち (2)

06 横山 仁 生活の柄 6

## ● エッセイ

08 片津 森 蝶ヶ岳から常念岳へ  
稜線散歩 (2)

13 佐藤ただし 水田とツバメ (9)

16 横山 仁 雑記 (11)

いちにち(2)

前田 勉

吹雪

川面を走り

河原の雪からはみ出た木の枝先が  
激しく震えている

若草色の橋が

途中から灰色の点描となって

見えない向こう岸へ

伸びていた

誰もいない河川敷  
風切り音で途切れたハクチョウの声  
いつもより哀しげに  
海の風に乗って流されてくる

届かないように  
悲しみへ  
流されないように  
限られた時間へ

目に見えない位置に立たされて  
不条理劇でもないのに  
両手で耳を塞ぎ目を閉じ口を嚙くんで  
あとは何ができる

届かないように  
数えることをやめた  
いちにちの時間

何ができる ナニガデキル

遅い朝

あなたは自分の中の今 を止めて  
ずっと

窓に舞う雪華を眺めていた

羽ばたく音が近づく

アイヌコタンで聞いたムツクリの音に似て  
ギユンギユンと力強く響かせ

頭上を飛んでいる



## 生活の柄 6

横山 仁

夜中 寝<sup>ね</sup>らえねがった  
という老母は 日中  
赤ん坊のように  
しげんに眠っている  
ときおり いびきをかいたりして

(どこからきて どこへ)

柴田正夫さんの「遺書」は  
「少年の指紋が  
くつきりつい」た「和紙の白紙」だ

(どこからきて どこへ)

鳴らない目覚まし時計の音を

少年は

雪の胎内で

ぐずぐずしながら

きいている

(どこからきて どこへ)

ところ

のいれものが かえるとき

ところも

また

## 蝶ヶ岳から常念岳へ稜線散歩 (二)

片津 森

### 二日目

夜中、三時半ころトイレに起きた。戻ってから間もなくご来光を見ようと周りで身支度をする音がしたので、こちらも起きることにした。肌寒い中、はるか東の方、安曇野市街にかかる雲の上から日が昇ってくるのを見ていた。反対側を振り返ると、穂高連峰の上部にその朝日が当たって明るくなっていた。モルゲンルート……あれがそれかと思った。いつか見た写真でもっとと赤く照らされていたように思ったが、あれがモルゲンルート。

五時半からの朝食を終えて、六時出発。一つ宿に泊まった人が向かっていけるコースは五本ある。昨日登ってきた三股への下山路、大滝山を経て徳本峠への

路、ヒュッテ近くから上高地と横尾を結ぶコースの途中にある徳澤に至る路、常念岳へ向かう途中から東の横尾方面へ下る路、そして常念岳への路。こちらは常念岳へ向かうが、その山頂を踏んでから後、常念小屋まで行って泊まるか、手前の分岐を下って三股に下るか保留中だ。常念岳への到着時刻次第だと思っているが、その目安を決めるどころまで詰めていない。まあ、ゆつくり歩いて行こう。

ぽかんと晴れた朝の稜線歩き。これがいい。展望はよく、穂高も槍も昨日と変わらずくつきり見えている。時折それら連峰を眺めつつ、高地の乾いた空気の中、砂礫を踏んで歩く。この感じがたまらない。靴の音も気持ちがいい。時間はたつぷりある。少し前を行く人の背中ザツクの揺れにも、地面に落ちた影にものんびりした山の朝を感じる。同じ方向へ向かう人が、それぞれのペースで歩いて行く。誰かに無理に合わせるといふわけではない、三々五々といったあたりかたが気に入っている。目的が同じなら、いつかまた顔を合わせるだろう。

横尾分岐、小ピーク、蝶槍、いくつかの鞍部や樹



林帯。それらを通過し、前を行く男性を追い越そうとしたときに、その人から声をかけられた。昨日、山頂に何人か居合わせた中の一人で、今朝も食事のテーブルが同じ人だったようだ。この人とは常念岳までおおむね同行することになった。静岡から来たといった。この山は初めて。来週、あの奥穂高岳へ行くのだという。岩場のところでコケモモの実を摘んでは口に入れている。この実は疲れをとるのでとてもいいと、私にも勧めてよこした。噛むと酸っぱい。ミネラル分を含んでいそうだ。

さらに進んでいくと、ようやく常念岳の山体が姿を現した。白っぽい無数の岩石が山肌に動脈をつくって、そこを皆登っている。かなり高いところをゆく登山者がアリののように見える。こちらも、彼らに続いていく。岩と岩の間を上り、岩の上に上がったり、間を回り込んだりしつつ、ぐんぐん高度を上げていく。さっき立っていた最後のピークも最低鞍部もはるか下に見える、かと思うとガスが隠してしまう。ルートは左の方へ逸れていき、それに従っていくと、下に今まで見えた最低鞍部は見えなくなった。さっきスケッチブック

を開いて(何も描けなかったが)いるうちに、静岡の人はかなり先行していたが、とうとう追いついた。その後は私が先になる。一〇時一〇分、常念岳山頂(二、八五七メートル)に着いた。

この山の名の由来について、「日本百名山」(深田久弥)には日本アルプスのパイオニアであるウエンストンが道案内の猟師から聞いたという話が紹介されている。「昔、密猟者がこの山の谷間で野営していると、頂上から風に乗って夕べの勤行のお経と鐘の音が聞こえてきた。それが夜通し続くので、密猟者は良心の呵責にあい、再びこの山に近づこうとしなかった。それを聞き伝えた麓の人々は、この山に常念坊という名前を付けたという。常に念じている僧のいる山の意である。(略)昔は常念岳とは言わず常念坊と呼んでいた」。さて、この先をどうするのかまだ決めかねていた。三股から登り、蝶ヶ岳から常念岳まで尾根を歩いた。で、この先、常念小屋に泊ってから明日下るか、小屋に向かわずに、今日ここから三股へ下るか。パンを食べながら登山地図のコースタイムを見ると、三股駐車場までの下りの所要時間は四時間五十分となってい

て、休憩時間を余分にとつても午後三時半から遅くとも四時には三股駐車場に着ける計算だ。それなら安曇野インターから秋田への帰路を少しでも北上できる。そう踏んで下山を決めたのだった。

山頂から少し下ると常念小屋へ通じる路が左へ分かれていた。この分岐を右へ行く。分岐付近に腰を下ろした若者たちの間から韓国語らしい会話が聞こえてきた。

白っぽい巨岩が重なったり横を向いたりしているところがルートになつていた。角ばった部分が上を向いているその頭を踏んで、一步一步飛び石伝いに下つた。これには注意を要した。足を滑らせたり、くじいたりしたら、かなり厄介なことになる。右は崖になつて切れ落ちている。ガスの向こうから登山者が登つてきた。そのザツクの大きいこと。腕を胸の前に組んでいて、黙想でもしているように見える。こんなふうにして登つてきたんだらうなあ。互いに相手を除けながらすれ違つた。岩に注意を集めながら下るうちに前常念に着いた。数人が休んでいた。こっちは少し休んだだけで下りを再開した。

少し経つてから、登りの男性と立ち話をした。なんでも今朝三股に来てみたところ駐車場が満杯だったので、一旦町まで戻り、タクシーで引き返して登山口に着いた。それから八時半の登山開始だったのだという。このコースの登りは余程の健脚でなければやめた方がよいと、昨日、登山開始後すぐに見た看板に注意書きがされていた。そのコースを登つてきたのだから人もさっきの人も。その健脚者がふっと指を向けた。その先の岩の上で鳥が動いた。何？ ホシガラスだと小さな声で教えてくれた。全体は黒っぽい褐色だが、首から胸にかけて白い斑点が散らばっている。その斑点が名にホシのつく由来だと、以前、ネットで調べたことがあつた。下界のガラスより一回りか二回り小さく、目つきもかわいいものだが、啼き声はガアガアと（ネットの某サイトでは啼き声も聞ける）というもので、やはりガラスの仲間だと納得がいく。秋田駒ヶ岳にも生息していることは聞いたことはあるが、実際にこの目で確かめたことはなかった。

その彼と別れてから間もなく、山体の上部を覆っているガスの中からようやく下へ抜け出たようだ。下つ

ていく先の方がはつきり見えてきた。さらに下るうちに安曇野市街が見えた。路は徐々に樹林帯の中に入つて行く。

アオモリトドマツの林を延々と下った。気がつくのと、左足の小指の付け根が靴の中で痛み始めている。樹間の向こうに、対面する山の斜面が見え隠れしてきた。地図にある崩沢尾根の北側斜面だろう。やがて、若い男性が女兒を連れて登ってきた。さつき急に下から泣き声が聞こえたがこの子だったのだろう。すれ違つてから一時間もたないうちにその二人が下りてきて、私を追い越していった。今度は女兒がおんぶさされていた。何だかキツネにでも遭遇したかのようにだった。親子らしい二人のことを思い返しながら下つていくと、間もなく、一人が路傍で休んでいる姿が見えた。女兒の服装から地元の人らしいと想像した。長い長い下りに閉口していたので、登山口までどのくらいか男性に尋ねてみると、登りの時に一時間かかったもので、下りは四十分くらいだと思う、とのことだった。まだそのくらい残っているのかと思つたが、気を取り直して下った。

沢の音が次第に大きくなつてきた。本沢だろう。傾斜が緩やかになり、やがて平坦路に変わつて、とうとう三時二十分、登山口に到着した。駐車場で車にザックを下ろしたのは三時四十分だった。

山日記（平成二十六年九月）から

## 水田とツバメ（九）

佐藤 ただし

### ・榎という名字

昭和二九年に発行された「豊岩郷土誌」によると、一六七二年（寛文一二年）豊岩前郷から四戸の農家が川岸に移住したとある。【四ツ小屋村誌では一六六二年（寛文二年）とある】（伊藤勘左工門、伊藤助右工門、榎佐五右工門、榎藤右工門の四家が宗家に当るといふ）。この四戸のうち、伊藤という名字は豊岩前郷にもあるが、榎は豊岩には無いため、どのような経緯があったのか調べてみようと思った。

「豊岩郷土誌」によると、豊岩は縄文時代には人が暮らした形跡があり、土器や石器などが発掘されている。また、西側の山の背にある山道を辿ってゆくと、

人の足形を大きくしたような窪地があり、古代人が生活した跡があるという。古代人がずっとこの地に暮らしていたのかどうか分かっていないが、八〇一年（延暦二〇年）頃、豊岩の最も古い部落と言われる前郷はすでに部落を形成していたといわれ、原始的な農耕が行われていたものと考えられている。鎌倉時代にはこの地に寺屋敷や神社も多くあつたと古文書に載っているという。

こうした資料を見ると、地形の利を生かしてこの地で土地を耕し、雄物川の魚を捕ったり、山の山菜を採ったりして、私達の祖先は宮々と暮らしてきたのだなと思う。

一方で戦国時代には秋田城之介の一族で安東義仁が前郷の西方の山手に白華城という城を築いた。この白華城は数代続き、安東季林（スエスゲ）の代に最も栄え、近隣の樺川や添川そして石田坂にも支城が作られていたというから、この頃は人の出入りがあつたと思われる。

しかしこの白華城は一五六七年（永祿一〇年）正月一五日、川向かいにある豊島城の豊島玄蕃の夜襲に

あつて落城する。

季林は命からがら逃げる事が出来たが、安東家の多くの武士は斬殺されたという。その後、季林の主である安東実季が豊島城を攻め、季林の旧領は復活し、一六〇二年（慶長七年）徳川幕府による国替えて安東実季が常陸の国に転封されるまで白華城は存続したという。

同じく昭和二九年に発行された「四ツ小屋村誌」の中に、「四ツ小屋村里民教訓書」という項があり、白華城が落城した件に触れて次のように書いてある。

「此里素豊岩之土地にして四面漠々たる萱野なりしを、三百年のむかし、前郷の白華の館落去之後、安藤家之愛士四方へ散在せし、内より豊巻の里に隠住之輩、此里の萱守となりて、四軒の小屋を結住居せしはそも此村之艸創にして、四ツ小屋という村名はこれよりぞ始まりけん」。(原文のまま)

この「四ツ小屋村里民教訓書」については、原本が不明であると、複写した榎恒吉氏が述べられているが、ここでは、白華城が敵の襲撃に会い、落城した際に四散した安藤家の愛士が萱野に住み、萱守として暮らし

ていたのがそもそも四ツ小屋の始まりと書いてある。

また、「続秋田のむかしむかし」(秋田魁新報社刊)の四ツ小屋の項には、「もとは豊岩村野方と呼んだ。川向かいに豊岩村の萱野があつて、仁井田の人たちがみだりに刈りとるので、番小屋を建てた。これが四ツ小屋の創世記(原文のまま)」とある。萱は屋根の葺き替えや簾の材料として重宝されていたようである。

豊岩前郷から移った四戸の農家は、「四ツ小屋村里民教訓書」や「続秋田のむかしむかし」にあるように萱守をしながら雄物川の岸に住み始め、開墾をして畑を少しずつ広げていったのかもしれない。

また、そこに移った人たちが古くから豊岩に定住していた農家の家系ではなく、安東家に仕えていた武士とか、他の土地からやって来た人達であれば、豊岩にこの名字が残っていないということもあり得ることだと思ふ。

江戸時代は武家や公家、それから一部の者以外は、名字を持っていても使用することが禁じられていたというから、検地帳などにある田畑の持ち主のところには名前だけが記載されている。時代が明治になって名

字を使うことが義務付けられてから、名字が急に増え、使われ始めたせいなのか、秋田県公文書館にある古い文書で榎という名字で載っていたのは明治一九年のものが一件だけで、それ以前の文書を見つけることは出来なかつた。

榎という名字は全国に分布し、秋田県では一六〇軒ほどあるようだが、この名字のルーツやどのように秋田で広まっていったのか、今回調べてみたが結局わからずじまいだった。

だが、普段は行くこともない公文書館に足を運び、貴重な絵図や公文書を見ることが出来たのは収穫だった。

## 雑記 (11)

横山 仁

132%と、ユーロ圏でギリシャに次いで2番目に高い。2011年のような債務危機が再来すれば、もうい立場にある。

何しろ、イタリアはユーロ加盟国であり、独自通貨国ではありません。イタリア政府は借り入れたユーロについて、中央銀行の国債買取で「対処」するわけにはいかないので。

目ウロコだったのは、飯山一郎氏の「てげてげ」  
(<http://grnbajp>)であった。

(引用開始)

◆平成30/02/19 (月) 2 日本国の借金が  
1100兆円?

日本国には「借金」などない!

このことが↑分らないと↓何も見えない

三橋貴明氏が↓卓越した見解を示している。

イタリアの債務比率は国内総生産 (GDP) 比

イタリアと日本が決定的に違うのは、日本政府の財政破綻はあり得ない (負債が100%日本円建てであるため) もの、イタリアはあり得るという点です。それはまあ、イタリア政府は勝手にユーロを発行することはできませんので、当然ながらデフォルトの可能性はあります。

とはいえ、この種の「日本とイタリアの違い」について無視し、イタリア政府が財政危機に追い込まれた際に、

「イタリアは破綻した。日本の状況はイタリアより

も悪い。日本も破綻する」

と、やっけてくるのが、日本の財務省をはじめとする財政破綻主義者たちのテンプレートです。

日本とイタリヤは違う。日本政府の負債は100%日本円建てで、「子会社」の日銀が買い取れば実質的に返済負担が消滅する。イタリヤの場合は、同じことができなない。

この当たり前の「事実」だけでも、日本国民はあらかじめ共有しておく必要があると思うのです。イタリヤにはありますが、日本に「国の借金問題」などありません。(記事)

日本政府が発行した国債を、日本銀行が円(¥)を増刷して買う。

これは↑「(国や国民の)借金」ではなく、「国富(国家の富)」だ！

「日本は1100兆円もの借金がある！」と、み～んな、思ってる。

しかし…

その1100兆円は「借金」ではない！返す必要なし！という考え方は、「メヌペサド(mespesado)」氏という識者が『放知技』に昨年から書いてきてくれたので、ワシの仲間(常識として)皆知っている。

「日本の借金は1100兆円！」と、み～んなが思っていたコトが、間違い！ということが分かると、心がスーッと軽くなって、日本の未来が明るく見えてきます。

ですから、上の文章を(長い！と思わずに)良～く読んでみて下さい。

飯山 一郎 (72)

(引用終わり)

かつて経済に関する入門書などをいろいろよんだが、このようなことは、書いていかなかったようにおもえる。なお、引用文中の(記事)というのは、引用元にリンクされているということ。

また「放知技」のNo.534 (2018/02/27 (Tue))で、

mespesado 氏は、大前研一氏の「ニューズ時評」にふれ述べている。

(引用開始)

緊縮財政を「まじめな」政策だと主張する。わざとですかね？それとも財務省と結託してる？

それにですよ。緊縮財政を取ったらデフレはますますひどくなり、長期金利は更に下がるはずで、国債は急騰し、ハイパーデフレ（そんな言葉あるんかいな??）になるはずで、経済理論的にも正反対のことを言っているのは何なんですかね？

というわけで、この人も経済評論家としては全く信用出来ない人の一人であることが確定しましたね。

(引用終わり)

異議ありし、だな。

また、mespesado 氏が紹介していた、「零細応援」という人の「働く人のケインズ革命」(<https://ameblo.jp/reisaiouen/>)では、「建物固定資産税と消費税を廃止し、法人税と所得累進課税を強化すれば、

賃金の上昇を伴う良いインフレが起こり、格差が是正され日本経済は回復する。通貨発行権を持ち生産大国である日本に、デフオルトまたはハイパーインフレの到来という意味における財政危機は存在しない。」として、もっと詳しく解説している。

\*

ここ数年、明治維新を見直す動きがあるようにおもえる。たんに、わたしの目がそこに行くようになっただけかもしれないが、たとえば、天木直人氏は、「実話BUNKAタワー（コアマガジン社）」からとして、メルマガで紹介している。(天木直人のメルマガジン2017月12月23日第1002号)

(引用開始)

日本をダメにした幕末・維新のクズ、ウースト

15

その最新号（2018年2月号）に、明治維新を次のように酷評した記事を見つけた。

「明治維新150周年だそうです。まあ、それからわずか60数年後には無謀な太平洋戦争に突入するわけで、維新などしない方がマシだったのですが、大河ドラマなどは未だに維新万歳です・・・」

こう前置きをして、維新の英雄と皆が思っている人物たちを次のように悪い者から順に次のように寸評して酷評している。

これには笑ってしまった。

同時に妙になっとくさせられた。

- 1 吉田松陰 テロリスト養成指導者
- 2 西郷隆盛 暗殺好きの戦争屋
- 3 大久保利通 粛清をくり返す独裁者
- 4 坂本龍馬 武器商人のハベシリ

- |    |       |                 |
|----|-------|-----------------|
| 5  | 高杉晋作  | できもしない攘夷を騒ぐ     |
| 6  | 大村益次郎 | 靖国問題の火付け役       |
| 7  | 伊藤博文  | 上が死んで総理になれただけ   |
| 8  | 板垣退助  | 何でも反対するクレーマー    |
| 9  | 大隈重信  | バカ大学を設立         |
| 10 | 福沢諭吉  | 拝金主義の西洋かぶれ      |
| 11 | 勝海舟   | アメリカ行って大物気取り    |
| 12 | 土方歳三  | 負け戦を続ける空気を読めない男 |
| 13 | 井上馨   | 財閥と癒着した汚職       |
| 14 | 山県有朋  | 老害政治家の巨頭        |
| 15 | 岩倉具視  | 偽勅をつくる君側の奸      |

もちろん、これら寸評の根拠をそれぞれ詳しく解説している。

そして、切って返す刀で、維新・幕末の歴史を十分に知らないままこれら歴史上の人物を尊敬するのは止めましょうとしめくくっている。

この筆者はただ者ではない。

(引用終わり)

実話BUNKAタブー編集部ツイッターでは、「2017年12月22日 天木直人さんが弊誌を読んでもらったときは……たまたまこの号を手にとっただけかもしませんが、なんて物好きなの……。」とあった。また、他で、「百田広援団の弊誌としては残念…」とあるので、雑誌の位置づけは、いわゆる右なのだろう。

その後、「天木直人のメールマガジン」2018月1月5日第13号では、「今年を明治維新の再評価議論活発化の元年にしたい」として、「きょう1月5日の毎日新聞のオピニオンラム「論点」は、明治150年を考えると題して識者三名の意見を掲載していた。」として、次のようにかいている。

(引用開始)

しかし、私が注目したのは、原田伊織という作家が語っていた要旨次の評価だ。

原田氏は、2012年に発表した「明治維新という過ち」という本で、明治維新論争に火をつけたと言われている人であると紹介されている。

「ネットウヨは私を『左翼の反日主義者』と呼び、一方で(左翼からは)『右翼の軍国主義者』とも批判される。中には脅迫まがいのものもある。どうしてこうも短絡的になるのか……こんな寛容性のない国になった元凶を作ったのが長州藩士たちだ。長州出身の元老たちによる明治の『長州藩閥』政治は大正以降も今に至るまで『長州型』政治として日本の政治風土の中で続いている。特徴は、憲法をはじめとする法律よりも、天皇を重視し利用してしまうこと。幕末には……倒幕の御旗として利用したが、明治以降はまさに『天皇原理主義』となり、国家を破壊に導いた。それ以前日本には天皇を神聖化した『原理主義』などは存在しなかった。

もう一点は、富国強兵、殖産興業の名の下で政治と軍部、軍事産業でもあった財界とが癒着する社会を生み出した事だろう。これが私のいう『長州型』政治で

ある。明治50年は寺内正毅、100年は佐藤栄作、そして150年は安倍晋三と、いずれも山口県（長州）出身の首相の下で祝典が営まれるのはただの偶然と思いたいが、戦後の自民党政権は一貫してこの長州型から抜けきれなかった。

最大の問題は歴史の『検証』が行われなかったことだ。『明治維新至上主義者』である司馬遼太郎氏は敬愛する大学の先輩ではあるが、『それだけは違いますよ』と言いたい。どれほど無駄な命がああ原理主義の名の下に葬り去られたか。その『過ち』の検証も反省もなく、日本は二度目の破滅（敗戦）を迎えたのだが、戦後も検証は行われず、ずるずると今も明確な外交方針すらなく、業界との癒着がニューズになる・・・

150年前は私たちの祖父や曾祖父が生きていた時代であり、そう遠い時間の流れではない・・・まだ手の届くところにあり、検証は間に合う。勝者に都合のいい歴史に洗脳されることなく、少々歯切れが悪くとも、史実は史実として真面目に向き合う勇氣を持ちたい・・・」

私はこの原田氏の著書を読んではいないが、鈴木莊

一氏の書いた「明治維新の正体」（毎日ワズ）の本で明治維新に対するひとつの見方に触れ、明治維新に対する自らの無知と、明治維新の複雑さに認識を新たにしました。

（引用終わり）

明治維新と言えば、秋田では吉田昭治氏だが、数年前になくなっていく。ご意見を聞いてみたかった。

また、「日本を守るのに右も左もない—人類を破滅に導くラスコミ・官僚・学者たち。ラスコミさえ倒せば、支配勢力は瓦解する—」（<http://blog.nihon-syakai.net/>）では、【幕末維新の代理人】<プロローグ>激動の時代、金貸しに手を貸した幕末維新の代理人」というような記事を読むことができる。

\*

魁2017年12月22日号に、西木正明氏が「覇権国家不在の気配」で、「覇権国家に不可欠なのが、大方の国々が納得する仲裁力だ。それにはある種の人徳

ならぬ国家徳が必須である。軍事力や経済力だけでは、世界の覇権国家にはなれない。」として、トランプ発言に触れ、「一つ間違うと第3次世界大戦の誘発につながりかねない」とかいている。

しかし、アメリカこそが、国家徳どころか、いちゃもん国家、ならず者国家だということは、すこし本やネットなどで調べればわかることだろうに、それだけ洗脳させられているのかしらん。それとも、メディアアの要請かな。

ついでにアメリカにふれると、マダロにかんして、つぎのような記事を見つけた。(「NEWSポストセブン」2012.09.15)

(引用開始)

マダロをスポーツで釣る米国人「絶滅危惧だから保護」の傲慢

豊かな自然に恵まれた日本では、海の幸、山の幸を

瀕らした世界一の食文化が育まれてきた。寿司、和牛、日本米など、海外で高く評価される料理・食材は多い。しかし、その日本の食卓が危機に瀕している。鮮魚が食べられなくなり、味噌や豆腐が食卓から消える日がやってくるかもしれない。その背後には、アメリカの政治的意図や中国の拡張、そして“内なる敵”の存在がある。

“外圧”が日本の食文化を脅かす事例の最たるものが、マダロ・クジラ問題だろう。

築地の中央卸売市場で毎年盛り上がりを見せるマダロの初競り。落札価格は急騰し、5年前まで1本500万円程度だったものが、今年は5649万円(大間産、269kg)の過去最高額となった。

「高級モノの競りでは中国が存在感を見せています。昨年は香港の寿司チェーンが3249万円で落札しましたし、今年も途中で中国の業者が5000万円台の値を示しました。落札した日本の寿司チェーンのオーナー

は『海外に持って行かれるより、日本でおいしいワグロを食べて欲しい』と頑張ったそうです」(築地のワグロ仲卸業者)

中国の拡張だけではない。

野生生物の国際取引を規制するワシントン条約会議に大西洋クロマグロの禁輸案が提起されたのは2年前のこと。欧米が支持した提案(提案国・モナコ)は大差で否決されたが、世界のクロマグロの約8割を消費する日本への批判はやまない。だが、そもそも欧米に批判の資格があるのか疑問だ。東京海洋大学の末永芳美教授が説明する。

「アメリカでは、大西洋クロマグロのスポーツフィッシングが弁護士や医師など富裕層の間で盛んです。『ゲーム・ハンティング』などと称して重さや体長を競う。彼らは重さや長さを測って写真を撮ったら、ワグロを浜に埋めて廃棄してきたのです。」

その後、1980年代にはワグロが日本で高く売れることに気付き、素人たちが一攫千金に乗り出した時期もあった。彼らがもっと自由にスポーツフィッシングを楽しむため、環境団体と組んでワグロ漁の禁止・制限に乗り出した経緯があります」

末永氏によれば、ICCAT(大西洋ワグロ類保存国際委員会)が米国に割り当てる漁獲枠(948.7t)のおよそ半分がスポーツフィッシング消費なのだという。つまり毎年400～500tがレジャー目的で消えているのだ(日本の同漁獲枠は1000t強)。ワグロを釣り上げては埋める人間に「絶滅危惧だから保護しろ」と言われても説得力はない。

※ SAPIO2012年9月19日号  
(引用終わり)

\*

2018年2月24日の「netgeek.biz」によれば、『嘘の新聞』と検索すると検索エンジンが朝日新聞を候補

## あとがき

◆この冬は調べものがあるって図書館に通うことが多かった。寒い家の中にいるよりは暖房の利いた施設の方が過ごしやすかったが、つつい眠くなり、スイミン(睡眠)グスツールになることもしばしばだった。(T)

◆戦前にも「横濱に住んでみた俳句や短歌を作る人達」で発行していた「海市」という文藝雑誌があることがわかった。同人の一人笹澤美明氏が出した詩集は『海市帖』(湯川弘文社、昭和18年2月)、定價一圓五拾錢、三千部とあった。すげえー。(J)

◆書店に行くと“語彙力”という文字の付く本がやたらと多い。チラリ立ち読みしてみると、語彙“数”ではなく誤用を例示しているものが多い。正しく使えるかどうかの“力”。読んでいて成る程、と感じた私のような人が多いということなのか?(B)

◆年が改まってから毎日冷えた。雪も降ったが近所に除雪車が来たのは一度だけ。路上の雪が雨と混ざってシャーベットになることは少なく、夜間に凍りついては滑って歩きにくくなる日も多かった。昨年暮れに畑から引き揚げて、庭の隅に埋めておいてダイコン数本を、2月初めに掘り起こそうとしたが、土はガチンガチンになっていて、植栽ベラでは歯が立たず、クワを使ってようやく1本抜いただけにした。残ったやつはまだ土の中だ。どうなっているだろう。ウフフ。(K)

「海市」第11号

2018年3月11日発行

発行 書肆えん

秋田市新屋松美町5-6 横山方

に出すことが分かった。どういうアルゴリズムなのかは分からないが、日本人の一般常識として正式に認定されたも同然だろう。」  
ネットでは、朝日のでっち上げは有名だから、当然

なんだろうな。毎月、自費で福島を取材している鳥賀陽弘道氏(元朝日記者)には、『朝日』ともあるうちのが。』(河出文庫)という著書もあるが、ろくに取材もできなくなったりして、辞めたという。